

「命と死との交換」

先週に引き続いて、今週も、礼拝堂とご自宅とで、場所を離れての礼拝となっています。同じ場所に集えない時でも、それぞれの場であって、主の御名によって祈るとき、それが教会堂であれ、家庭であれ、職場であれ、どこにおいてであれ、主はそこにいらしてくださいます。祈りにおいて互いに近づいて、ご一緒にみ言葉に聴きましょう。

主のご受難を覚えるレント・受難節を過ごして参りました。

今日は棕櫚しゅろの主日、受難週しゅろの一日目です。

今週の木曜日には、イエスさまは弟子たちと最後の晩餐を共になさってから、ゲツセマネに行き、お祈りをなさいます。その夜、大勢の者たちが手に松明たいまつや剣や棒をもってイエスさまを捕えるためにやってきました。その先頭に、イスカリオテのユダがいました。イエスさまは逮捕され、ユダヤの最高法院（サンヘドリン）において尋問をされます。死刑はすでに確定していて、それに見合う口実を見つけるための尋問でした。

最高法院を構成しているメンバーは、サドカイ派の祭司長、ファリサイ派の律法学者、そして長老たちです。サドカイ派とファリサイ派は対立関係にあったのですが、自分たちが長い間かけて築いてきた利益を得る宗教制度が、イエスさまの存在によって崩壊してしまうことを恐れました。彼らはイエスさまに、いじわるな質問をし

ましたが、反駁はんぱくできない答えを返されました。民衆は日増しにイエスさまに注目していきます。何らかの手を打たなければならない。ユダヤの指導者たちは、イエスさまを殺そうと相談しました。マルコ福音書ですと14章の最初に記されています。過越祭と除酵祭の二日前です。彼らは「民衆が騒ぎだすといけないから、祭りの間はやめておこう（マルコ14：2）」と、言っていました。しかしまさに、ユダヤの大切なお祭り「過越祭」の間中、最高法院はイエスさまを殺す計画を練っていたのです。本来、考え方の異なるサドカイ派とファリサイ派とが手を組んだのです。対立していた者たちが、誰かを攻撃することにおいて結託する。これは聖書の時代だけでなく、わたしたちの身近でも、あることです。そして、最高法院は、イエスさまを死刑にすることを決定していたのです。

しかしいつ、どのように、どのような名目で、イエスさまを処刑することを実行に移すかが、定まってはいませんでした。そこに、イエスさまを殺すチャンスが巡って来ました。それは、イエスさまの弟子の一人イスカリオテのユダが、もたらしました。

逮捕と裁判は、急遽、決行されなければなりません。なぜなら、過越祭が本格的にはじまってしまえば、裁判を行うことができないというユダヤの律法があったからです。大祭司は早速、イエスさまを逮捕するよう命じました。すでにイエスさまを殺すことは

決まっています。ユダの協力があってイエスさまを捕縛ほぼくすることができたものの、処刑する正当な理由を見つけ出さなければならない。そのような理不尽な裁判が、行われようとしているのです。

処刑とすることが決まっています、その理由を後から捜す。実はこのようなことも、他人事ではありません。わたしたちも、自分が「こうしよう」ということがすでに決まっています、それを裏付ける、適当なみことばを見つける、というようなことがあるならば、それは最高法院の行動と似ているかもしれません。まず神のことばを聞き、それに従うということとは違うのです。あくまでも自分がしたいことや、自分の考えが先にあって、聖書を利用する。聖書、神さまのみことばを、自分のために利用するようなことを、していないか、今一度、省みてみたいと思うのです。

さて、今日与えられているところで、最高法院はイエスさまにとって不利な証言を求めましたが、証言は食い違い、死刑にするための証言は得られなかった、とありました。大祭司はイエスさまに、「何も答えないのか。」と尋ねますが、イエスさまは何もお答えになりません。大祭司はもう一度たずねます。「お前は、ほむべき方の子、メシアなのか」。イエスさまは「そうです」とお答えになりました。それを聴いて大祭司は自分の衣を引き裂きながら、「神への冒涇だ！」と怒り叫び、そこに集まっていた一同も「死刑にすべきだ」とし、イエスさまをローマ総督ポンテオ・ピラトへと、引き渡したのです。

当時、ユダヤを支配していたローマ帝国は、ローマの支配を否定しない限り、宗教の活動を認めていました。ユダヤ人はローマ総督のもとで裁判の決定をできたのですが、決定できる事柄は、ユダヤ人の信仰に関わる事柄のみでした。死刑執行権はローマにありました（ヨハネ18：31）ので、ユダヤの指導者たちは、イエスさまをピラトのもとで、死刑にさせようとしたのです。「このイエスとい

う人は、ローマに反逆を企てていますよ。ローマのやり方、つまり十字架刑で、処刑してください」というのです。

エルサレムでは、この裁判が行われた時は、過越祭が行われていました。ユダヤ人の最大のお祭です。祭りのときには、一人の囚人を釈放する「恩赦」の習慣がありました。この年も囚人の恩赦を求めて、群衆が押し掛けてきました。ピラトは群衆に、「あのユダヤ人の王を釈放してほしいのか」と問いました。それは15：10にあるように「祭司長たちがイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたから」です。ピラトは真相を知っていたのです。祭司長たちがイエスさまを殺そうとしているのは、ねたみのためだということ。そしてピラトは、イエスさまを殺したいと思っているのは祭司長たちだけで、一般の人たちは、そうではないだろうと思って、「あのユダヤ人の王を釈放してほしいのか？」と尋ねたのです。

ところが、群衆は祭司長たちに煽動せんどうされていました。バラバという囚人の方を釈放してくれるように求めたのです。バラバは15：7にあるように「暴動のとき人殺しをして投獄されていた暴徒たち」の一人でした。ローマにとって、危険な人物。それに対してイエスさまは、何かテロ行為を行ったわけでもない。ピラトはバラバを釈放してほしいと言っている群衆たちに、改めて尋ねました。「それでは、ユダヤ人の王とお前たちが言っているあの者は、どうしてほしいのか」。群衆は「十字架につけろ！」と叫びました。「いったいどんな悪事を働いたというのか」死刑にするほどの罪は見当たらない。しかし群衆はますます激しく「十字架につけろ！」と叫び立てたのでした。

ピラトは問われているのです。指導者たちや群衆たちが「十字架につけろ」とわめきたてている、この人は一体誰なのか？この人を十字架につけるのか、バラバを十字架につけるのか、ピラトは決めなければならなかったのです。

ピラトの決断は、15節です。「ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバを釈放した。そして、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した」。ピラトは「群衆を満足させようと思った」。もしこの人を釈放したら、暴動が起るかもしれないと恐れたのです。自らの信念を貫くという思いや、人を裁くのに必要な誠実さは、ありません。こうしてイエスさまの十字架の死は、確定したのです。

私たちも、ピラトと同じ立場に立たされます。イエスさまという人は救い主なのか？この方信じ、従っていくことは、本当に必要なのか？

私たちは、こちらからイエスさまに問うことが多いのではないのでしょうか。主よ、あなたは誰なのですか？あなたが救い主ならその証拠がありますか？証拠を見せてくれたら、信じます。何かすぐにご利益があるなら、信じます、と。しかし、実は私たちこそ、イエスさまから問われているのです。

「あなたは私を、どう思っているのですか？」

「何が真理で、何が正しいことなのですか？」

「私が救い主であるのかないのか、それはあなたに問われていることです。あなたは私と共に生きるのですか、それともわたしを拒み続けるのですか？」

群衆をおそれ、自分の立ち位置を守り抜いたピラトは、イエスさ

まを十字架につけた代表として、名前を遺しました。周りに流されて、イエスさまをなきものにしたピラトの在り方は、特別なことではないでしょう。私たちも、ピラトと同じように、いつもイエスさまの想いを疑い、自分の判断を一番にし、「真理を曲げて、それは現実を生きる上では仕方のないこと、信仰の問題は教会の中だけのこと、現実はそう甘くないのだよ・・・」とか、「今日のところは、イエスさまを私の世界からは追い出しておこう。私は私の判断で、あるいは誰かの評価を一番にして生きていよう・・・」そのように生活してきているのでは、ないでしょうか。周囲の人々がどう思っているか、自分にとってどちらが好都合か。そうやってピラトのように、イエスさまを十字架へと、追いやり続けてきたのではないのでしょうか。

「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ」と使徒信条で告白する時、私たちは、「ポンテオ・ピラト」のところに、自分自身の名前をあてはめて告白するしかない者なのです。

「主は〇〇（自分の名前）のもとに苦しみを受け、十字架につけられた」。イエスさまの十字架の苦しみと死は、主からの問いに、誠実に、真剣に答えることができなかった、私たち自身の罪と、弱さのためだったのです。

群衆は「イエスを十字架につけろ！」と叫びました。この群衆はイエスさまがエルサレムに入られた時、先ほどわたしたちも歌ったように「ホサナ！」と歌い、喜び迎えた人々です。それからまだ一週間も経っていないのに、今や彼らは「イエスを十字架につけろ」と叫んでいます。この群衆の姿もまた、私たちの姿であると言わなければなりません。

彼らが主を喜び迎えたのは、「この人こそ、自分たちをローマから解放してくれる、力ある救い主だ」と期待したからです。しかし主は、彼らの願いどおりの救い主ではありませんでした。むしろ弱さを身に帯びた方でした。期待が外れた群衆は、「こんな救い主なら要らない！」と叫ぶようになりました。自分の思い願っている救いを期待して、一時は熱心に信じるけれども、期待が叶えられないと、主を捨てる。こうして主は、十字架につけられるために引き渡されたのです。

けれども、主は、引き渡されて処刑されてしまっただけで、終わったわけではありません。自己中心に生きて、主をなきものにしてしまうわたしたちを赦し、わたしたちの罪や弱さを、十字架の上で滅ぼし、そしてご自分の復活の命をも、わたしたちに与えてくださり、死を越えて、どこまでも共に生きてくださるのです。

主の死刑判決と引き替えに、釈放された人がいます。バラバです。本来、十字架につけられるはずだったバラバが赦され、解放された。このバラバもまた、私たち自身の姿です。主が十字架につけられて死刑になったことによって、その命と引き替えに、罪を赦され、新しく生きる者とされたバラバ。バラバは暗い牢獄の中で、死を覚悟し、死刑執行を待っていたのです。それが突然「あなたは釈放ですよ！赦されて、生きるのですよ！」と言われ、無罪放免となりました。私たちは皆、バラバなのです。

まことに、聖書はわたくしたちのことを記している書物で、わたくしたちの罪の赦しと、わたくしたちの新しい命のことを、告げ知らせているのです。

今日の交読文で、イザヤ53章を交読しました。「苦難のしもべ」

と呼ばれる箇所です。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために彼らの罪を自ら負った。……彼が自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった

イザヤ書で語られていた「苦難のしもべ」は、イエスさまのことを告げていると、キリスト教会は読んできました。父なる神さまは、ご自分の独り子を与えつくすほどに、私たちを愛してくださっている、このことは、旧約以来、一貫していることです。イエスさまが世にきたのは、「旧約では怒っていた神さまの心を、新約で変えるため」ではなくて、永遠の昔から一貫して変わらない神の愛の御想いを、表すためなのです。私たちの罪は深いです。けれども、私たちが罪びとであることは、神の愛の妨げにはならないのです。神の愛は貫かれるのです。

こうして、命と死が、イエスさまによって交換されました。主が私たちの罪を贖ってくださり、本来、死ぬべきはずだった私たちに、主の命が与えられました。私たちが主を愛する前から、主の命と、私たちの死との交換がなされていたのです。

今日の招きの言葉で聴いたコロサイ書では、罪の赦しを語るときに、「証書を破棄される」という言葉が使われていました。

コロサイ2：14「わたしたちを訴えて不利に陥っていた証書を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。」

「証書を破棄する」というのは、もともとは「白くぬる」という意味の言葉です。やがて、「消す」という意味を含むようになりました。

当時、借金の証書を破棄する場合には、証書の全面にバツ印を書いたそうです。ですからコロサイ書の「塗り消す」という言葉は、

当時の証書破棄には、なじみのない言葉なのです。けれども、わざわざこの言葉を使って、罪の赦しを語った。なぜでしょうか？それは、主の十字架の救いは「わたしたちの罪の痕跡を一切消し去る」ということだからです。私たちの罪は、キリストの贖罪しよくざいによって、痕跡さえものこらないものなのです。このように聖書は、神の赦しの徹底性を語るのです。

新型コロナウイルスの不安の中、わたくしたちはレントを歩んできました。感染症の患者さんたちのために、またその治療にあたる医療従事者の皆さんのために、神さまの癒しとお守りがあるようにと、祈り続けてきています。見えないウイルスに不安を抱えていたのは、今だけでありません。中世末期には、ペストの流行がありました。大勢の人々が死んでゆく中、自分たちは一体どうなってしまうのか。当時は「ペストは神の罰だ」と言われていました。人々は

「死んだ後に地獄れんごくや煉獄れんごくに落ちたらどうしよう……」と誰もが怯えていました。不安の中、人々がお金を払って買ったのが、「免罪符」でした。いま、人々が不安に駆られて買い占めているのは、マスクやトイレットペーパーです。中世の人々が買い占めたのは、免罪符でした。お金さえ払えば地獄や煉獄に行かなくても済む……。そんな折、ヴィッテンベルク大学の聖書の教授であったマルティン・ルターが、立ち上がったのでした。ルターは 95 か条の提題と言われる公開質問状をヴィッテンベルク城の教会の扉に貼りだしました。こうして宗教改革が始まって、今わたしたちが礼拝生活をしているプロテスタント教会が生まれていきました。

今、目に見えない新型コロナウイルスの脅威と、わたしたちは、たた

かっていますが、一番、たたかってくださっているのはイエスさまです。そしてわたしたちの肉の目には見えませんが、イエスさまは勝利していらっしゃるのです。この後、讚美歌一編 296 番を賛美します。「わがため勝ちにし主 ましませば」「わがためたすくる主 ましませば」「わがため導く主 ましませば」、わたしたちの想いは乱れることはない、と歌います。はからずも、コロナウイルスに対抗して、ばらばらだった世界が一つになる道が、いま開かれているのかもしれない。かつて、対立していたサドカイ派とファリサイ派が、結託して主を十字架へと追いやったように、ではなく、これまで自己中心ゆえに、一つになれなかった者同士が、十字架と復活の主のもとに力を合わせて、主の御足跡に従い、復活の主の命に、ともにあずかる道が、開かれています。

祈りを共にしながら、それぞれに託されている使命を果たして参りましょう。勝利の主と共に、教会の友とともに、イースターへと歩みゆくことといたしましょう。